

総合治水のための流出解析法をめざせ

第16回武庫川流域委員会。流出モデルの選択について流出解析WTより示されたのは、貯留関数法と準線形貯留型モデルとの2つに絞り準線形貯留型モデルが優れたものとしている。多くの委員が後者を選んだのは当然の帰結だ。選択という作業に値しない。

長峰・岡田委員が指摘したように、両者にはあまり違いがないと考えられる。前者は、以前の武庫川工事実施基本計画の策定において採用され、後者は現在の県当局提示の計画において使われている。導かれた甲武橋における基本高水量は全く同じだ。両者にたいした違いがないと言える。引き伸ばしの作業など今後の判断が問題である。

しかし総合治水の観点からは、「分散型モデル」が好ましいのは明らかだ。武庫川が持つ諸流域の特殊性を考えるなら、キメ細かい解析が好ましい。ところが武庫川ではデータの質と量がなく整合性がとれないとしてこのモデルは顧みられない。治水対策は急がれるとしても、総合治水の全体計画を実現するのは、相当の時間を必要とする。流出解析WTが絞って示した2モデルの欠陥を明らかにすること。そして、総合治水を実現するために、今からデータ蓄積を進め、よりよいモデルの適用条件を整えることが望まれる。

前段の方向は、まちづくり・環境・森林農地の各WGの熱心な作業とも照応するものとする。これらWGの努力が無駄になってはならない。でき上がった治水計画を繕うのではなく、WGの作業が必ず総合治水の計画の中で具体的に結実しなければならない。各WGもここに焦点を当てて議論をすすめるべきだ。

2005年4月28日